

イエズス会士系著訳書の受容

江戸時代において西洋の学術・知識を受け入れるチャネルは幾つかあったが、筆者はこれを四つのルートにまとめて考えている。

- (一) いわゆるキリシタン時代のカトリックの宣教師たちによるもの。これはシャヴィエルの来日(二五四九)から一連の鎖国令までの約九十年間である。
- (二) 中国で布教したカトリック宣教師たちの著訳書。彼らは種々の会派に属したが、リッチ(利瑪竇、一五五二—一六一〇)らイエズス会士の活動が最も顕著なので、ここではイエズス会で代表させることにする。
- (三) 蘭学・洋学。『解体新書』(二七七四)が象徴するようなオランダ語を通じて学ばれた西洋学術知識の総称をいう。開国後は、英語、ロシア語、フランス語

吉田 忠

などの学習も始まり、それらから直接翻訳もなされるが、数量的にはオランダ語からが主流である。

(四) 中国に派遣されたプロテスタント宣教師の著訳書。アヘン戦争後広東や上海で布教した宣教師たちによるもの。

(一)と(三)の直接ルートに比べ、(二)と(四)の中国経由の間接ルートの役割はあまり重視されてこなかったきらいがある。そこで何か研究史を書くようにとの編集子の需めに応じ、この(二)のルート、イエズス会士系著訳書の江戸時代における受容というテーマで若干研究史を振り返ってみたい。

まず呼称であるが、従来漢訳洋書とか南蛮学統と呼ばれてきた。南蛮学統は魅力的な名称だが、提唱者と考え

られる海老沢有道『南蛮学統の研究』は羅山・ハビアン論争から、寛政改暦時の『曆象考成後編』研究、そして司馬江漢、国学にまで及んでいる。これでは、先の(一)と(二)、及び(二)と(三)のルートがごちゃ混ぜになり、あたかも連続的な印象を与え、混同を引き起こしやしい。鎖国という断絶が見え難いし、中国語を介してなのか、あるいは西洋語(ポルトガル語、ラテン語、オランダ語など)を介してなのかその媒介言語の差が解らなくなっている。漢訳洋書という表現は、(二)と(四)の差違を曖昧とさせる。それに洋書という言葉は、日常語ではふつう西洋語で書かれた書物を指している。上の四つのルートは、それぞれ歴史的状况を引きずっており、それぞれを通じての西洋理解や、西洋学術の受容がそれらの特殊条件のもとに成り立っている。したがってこれらは明確に区別して論ずるべきものと考えられる。そうした意味で、上述の如く、イエズス会士系著訳書と名付けてみたが、これとて必ずしも最適とは言い難い。中国語ではカトリックを天主教と称するから、天主教系著訳書と呼ぶのも一案であろうが、より正確には天主教系漢籍、天主教系漢文(中文西洋書といったところであろうか。

媒介言語の差にこだわる理由は単純である。ポルトガル語にせよ、オランダ語にせよ、『蘭学事始』で杉田玄

白が語るエピソードに象徴されるように、その習得には多大の努力を要した。これに対し中文書は、知識人なら幼少の頃より素読を通じて身につけた漢文で、さほど苦勞なく、読解できたからである。つまり読書人口が圧倒的に違い、それだけ普及の潜在的可能性も大きかった。蘭学塾においても、漢文の基礎知識が必須であることを強調し、平行してその授業を課すところもあつた。漢文は、その意味では、西洋中世のラテン語に似て、学問をする人々の言葉であつた。

一、宣教師の活動

受容の諸相を論ずる前に、イエズス会士をはじめとする宣教師の中国思想界への影響をまずおさえておく必要があるだろう。筆者が初めて中国を訪れた七〇年代終わりや八〇年代初めは、中国の科学史家はおおむらにこの問題を語るのを避けたが、文化大革命の余波が残っていたものと思われる。八〇年代初め香港で第二回中国科学史国際会議が開かれた帰途、広州へ出向いたが、北京へ列車で帰る中国科学院科学史研究所の学者と一夕歓談したことがある。この時比較的具体的に研究状況を聞いたが、まだ宣教師関係の研究を公表することは控え

る事情があるように思えた。それと比べると今日の状況は隔世の感がある。九〇年代から、こうした研究の公刊が活発になってきた。いま科学史関係のモノグラフを除外すると、たとえば曹や尚が宣教師と科学の関係を一般的に扱っている。もう少し広い視野では徐の書があり、儒学との関係では孫の書をあげておこう。ただし最後の孫の著書は儒学といっても、リッチと彼の協力者徐光啓や李之藻の対儒学観を考察するのみで、初期に限られている。またサンフランシスコで開催された国際会議の報告書(卓)も出版されている。科学史関係の周辺から中国の研究状況を捉えようとしているから、中国哲学史・思想史の専書における分析については見落としがあるが、少なくとも上掲書に限っては、キリスト教と儒学の遭遇の思想的検討という面では聊か物足りない。

この点で近年の注目すべき研究は岡本さえ『近世中国の比較思想―異文化との邂逅―』である。本文五百頁弱(巻末に七十頁分の十六世紀から十八世紀の関係漢籍及び欧文文献リストが附せられていて便利である)と浩瀚な本書は、宣教師と明清朝文人との思想交流を主題とし、『口鐸日抄』などの書により彼らの対話の具体相を跡づけ、また中国知識人から知った考えを宣教師たちが伝えた報告書の影響を、デカルト主義者マルブランシユ、イエズス会士

デュアルドの著作を通じて分析している。

リッチの協力者徐光啓は、暦、火器、測量、地図製作、灌漑など西学の優位を認識し、その実用的側面を強調することで西洋科学を広めた。たとえば有名な『幾何原本』の序文は数学の実用的効用が逐条的に述べられている。アレニ(艾儒略、一五八二―一六四九)ら宣教師の、福建・浙江での文人との交流を描く章(六五―一四頁、一九七―一九〇頁)は、リッチ以外江南での活動はこれまでに具体的に説かれることがあまりなかっただけに読み応えがある。アレニと福建地方の文人との十年間の交流を綴った『口鐸日抄』は、天文気象から風水占星に及び、靈魂論から信仰に至るまでの諸問題の対話記録である。このように宣教師と交わるうちに中国の知識人たちは、彼らの教養、学識に深く印象づけられ、キリスト教を含め西洋の学問(西学)が中国の儒学と対立するものではないと考えるものも現れるようになる。陸象山の「東南西北、有聖人出焉。同此心、同此理也」を引いて、東も西も心や理は同じ(東海西海、心同理同)と言われた(二二頁)。またアダム・シャル(湯若望、一五九一―一六六六)を「西海の儒、すなわち中華の大儒」(二五五頁)と呼ぶ儒官まで現れたのであった。たしかに本書は中国思想史の分野の書である。しかし、そこで描写・分析される諸問

題は日本思想史研究者にも多くの示唆を含んでおり、教えられるところが多い。本書は東京大学東洋文化研究所の研究報告として刊行され、市販されていない。容易に手に取れないのは残念だが、然るべき図書館には寄贈されていよう。探す努力に値する書なので、推奨したい。

中国に入った宣教師たちは中国語を学び、直接中国知識人と交わった。禁教令以後の日本ではこれはかなわなかった。ちなみに蘭学時代でも、オランダ人との直接対話は、出島や江戸参府中と限られた機会のみ許されたのであり、それも許可を要した。したがって、専ら書物を通じてのヨーロッパ文化との接触となる。しかし、イェズ会士系著訳書の場合には禁書という特殊事情があった。

二、禁書

イェズ会士系著訳書の輸入禁止は、いわゆる鎖国によりキリスト教が禁ぜられたからであるが、禁書令が出された寛永七年（一六三〇）は、鎖国がいちおうの完成をみた寛永十六年（一六三九）より九年間先行している。いま禁書の標準的な先行研究（伊東、中村、今田）によってその経緯をまづごく簡単に素描しておこう。「欧羅巴

人利瑪竇等之作參拾貳種之書、並邪宗門教化之書」の輸入が禁ぜられたが、「邪宗門之噂国俗風儀等之書入候分者其儘商売」（好書故事、二二五頁）が許されていることに注目したい。三十二種とは、『天学初函』の二十一種（本来の十九部とは、附録を数えたりして異同がある、伊東、一九三―一九七頁）とキリスト教教義関係書十一種であった。こうして書物目利を新設して中国からの輸入書の検閲制度が始まる。貞享二年（一六八五）の厳令と通称されるように、「耶蘇之儀者勿論、其徒利瑪竇等之噂、人物風俗聊二而も書載有之分」は禁書として焼捨・墨消の処分となった（伊東、二〇〇頁）。これまで許されていたキリスト教及び教徒の噂・風俗を載せる書物も対象となった。享保五年（一七二〇）將軍吉宗が禁書制度の緩和をはかった。長崎奉行宛通達には「右諸法儀に可用類是文句等者弥停止可致候。噂迄にて不障文句書入候分者、御用物者勿論、世間江売買為致候而も不苦」とあって、噂程度の記述のある書物は売買も可能とされている。基本的には寛永の禁令の路線に戻ったと考えられる。ところで、これは教科書に「洋書の解禁」としばしば呼ばれている。洋書とあるせいも、ご丁寧にも、オランダ語の書物の輸入禁止が解けたと解説が附せられることもある。しかし、板沢（四四〇―四六三頁）が夙に指摘しているように、こ

これは中国から舶載されるイエズス会士系著訳書が対象であつて、ヨーロッパの言語による著書は関係ない。もっともこの混同は歴史的であつて、『蘭学事始』(二六頁)では「渡海御免の和蘭にても、その通用の横行の文字、読み書きのことは御禁止」とある。

吉宗による禁書の緩和には一つのエピソードが伝わっている。吉宗は改暦を意図し、京都から中根元圭を招き、当時舶載された梅文鼎の『曆算全書』を研究させた(この訓点本が内閣文庫に現存する)。そして元圭は、禁書の撤令のため「暦学のたよりとする書甚だ乏し、本邦の暦学を精微にいたらしめんとすの御旨ならば、まづこの撤禁をゆるべ玉ふべし」(中村、一二四頁)と建議したことに端を発すると言われる。こうして、教義書を除いて、科学や地理書などは輸入が許されたとされる。

吉宗による弛禁はその後の学術・思想に影響を与えたとしてふつう積極的に評価されており、筆者も蘭学が勃興する以前、あるいは西洋理解の前提としてのその役割を評価する。しかし、これには異論があるようなので、若干附言したい。確かに、明和八年(一七七二)の禁書目録を初めとするその後の禁書目録には、寛永七年に指定された書や貞享二年の撤禁以後に禁書とされた書目が掲載され、あまり変化がない。弛禁令は長崎奉行への通

達であつて、一般に幕府は代替の法令を出すことはあつても、いったん出した法令を廃止することはほとんどなく、また中村(一二七頁)も言うように幕府はふつうこれを公示することはなかった。関係役人のみが心得ていることであつて、世間に公表することはないから、本屋仲間が出した明和八年の禁書目録に大きな変更がないのは当然である。また種々の禁書目録に引き続いて出るのは『天学初函』中の科学書の幾つかは『守山閣叢書』や『海山仙館叢書』などに収められるが、これら叢書に紛れ込んで輸入されている。筆者は全国の研究者の協力を得てかつてイエズス会士系著訳書の現存全国調査を、百の図書館・機関で行つたことがある。たとえばリッチの『幾何原本』は二十六点現存し、ウルシス(熊三拔、一五七五—一六二〇)の『泰西水法』は水を利用した器械を紹介した技術書であるが、十五点あり、うち十一点が写本なのが目を惹く(吉田(b)、一九—二〇頁、四七—四八頁)。叢書所収本と違つて、写本はそれなりの意図をもつて写されたと考えられるからである。

このように後の禁書目録に相変わらず掲載される科学書も、叢書にまぎれこんだものは無論、そうでなくとも写本として伝えられた。しかし、伊東(二二〇頁)、中村(二二八頁)が指摘するように、弛禁令の影響は、遡及し

て論ずるよりも、その発令以後への影響で論ずるべきであろう。志筑忠雄も『曆象新書』で参照した梅文鼎の『曆算全書』は、江戸時代の天文暦算・数学に大きな影響を与えた書物であった。以下、イエズス会士系著訳書の受容・影響について、天文暦算、地理、靈魂論の各分野について考察する。

三、天文暦算

イエズス会士系著訳書が与えた影響が最も大きい分野は、おそらく天文暦算であろう。なかでも麻田剛立と弟子高橋至時・間重富の『曆象考成後編』のケプラー楕円軌道論研究と、それに基づく至時らの寛政改暦は有名である。その数理的解析の分析はここでは対象外として、概観は中山（一一九―一三三頁）と渡辺（上、一八九―一三六頁）により得られよう。徐光啓の主導で発売した明末の改暦計画は死後『崇禎曆書』や、清朝になって時憲暦として結実するが、これに収められた曆算書は最新の西洋天文学を伝えるものとして、江戸時代の天文学者の研究の中心となる。たとえば仙台藩の天文学者戸板保佑は、京都土御門家のもとで曆学を研鑽するが、『崇禎曆書』の一部を彼が写し研究した写本多数が天理大学図書館に

現存している。『崇禎曆書』や『曆象考成』の立場はティコ・ブラーエの天文学にもとづき、惑星の運動を基本的には円軌道で計算する。他方『曆象考成後編』はケプラー楕円軌道論を最新理論として採用し、これは精度の向上を狙う改暦にあたっては必須の技法であった。

曆算学では梅文鼎の影響を見落とすわけにはいかない。先述の元圭が訓点をつけた『曆算全書』（一七二四）も彼の手になり、刊行後わずか二年で舶載されている。小林は、内閣文庫に現存する（紅葉山文庫旧蔵）梅文鼎の『曆算全書』、『曆学全書』などの著書の幕府内における学習状況を跡づけている。ところで、この書の影響の最たるものは、三角法（平面および球面）を伝えたことであろう。三角法は天文暦算・測量・数学の基本術で、多くの算家がこれを学び、文化十三年（一八一六）にはその一部が訓点をつけて和刻されている。もう一つの基本である対数表は康熙帝が編纂せしめた『数理精蘊』（一七三三）により学ばれた。蘭書を通じて学ぶ以前に、これらの書から中国經由で三角法と対数は修得されていたのである。

梅文鼎は、イエズス会士系著訳書から多くを学び、これを自家葉籠のものとして、中国の伝統数学・曆算学の枠組みに入れた。類似のスタンスは方以智や游藝にも認められる。藩校の旧蔵書目録を見ると、両者の著書『物

理小識』と『天経或問』を蔵する藩が少なくないのがわかる。私見では、この両著がイエズス会士系著書として最も読まれた本ではないかと考えている。殊に『天経或問』は、和刻本（一七三〇）の刊行によって大いに流布した。現存する同書のほとんどがこの和刻本であつて、管見に入る限り清版は内閣文庫に蔵するのみである。本書の受容についてはかつて述べたのでそれに譲るが（吉田^(a)、馮、一五〇―一五一頁）、これがかくも広範囲に拡がった理由は、宋学の気の理論を基本としていること、西洋新説を説くものの西学は質測・器数のレベルですぐれているが、通幾・至理のレベルでは劣っているという考え方の二つが、江戸時代の知識人にアピールしたからだろうと結論した。『物理小識』は『解体新書』でも参照されていて江戸時代多くの読者がいたはずである。その一部は難解で取り付き難いが、自然学・科学のみならず占候・鬼神と多岐にわたっている。また方父子の周易研究書（馮、二五六―二七四頁）が内閣文庫に現存している。幕府に近い者に限られようが、これを利用した儒者はいなかったのだろうか。方以智哲学受容の研究は今後の課題である（なお間接的に西洋知識を伝える梅、方、遊ら中国人の著書もイエズス会七案著訳書に含めている。「系」と称する所以である）。

四、世界認識

リッチの『坤輿万国全図』は世界についての江戸時代の人々の認識を形成したものである。この万曆三十年（二六〇二）原刻図が日本に二点現存し、模写が二十五図現存するという事実は（世界図遊覧、五三頁）、その大きさが縦一・七メートル前後、横六・二メートル（重文の万曆三十年図）と巨大であるだけに驚嘆すべきである。これに、この図を参照して作製された地球儀五点（地球儀の世界、七二―七三頁）やこれにならつて作られた後のリッチ系世界図を加えれば、その影響の大きさが想像できよう。そもそも、われわれが見慣れている世界地図の中国・日本がほぼ中央にあり、右に太平洋を挟んで南北アメリカ、左にユーラシア大陸があるという構図は、リッチ世界図に始まる。さらにこの地図は亜細亜、欧邏巴、利未亜（アフリカ）、亜墨利加と南極近辺に拡がる墨瓦蟬泥加（マガラニカ）の五州や地中海や大西洋などの地名表記という世界認識の基本的枠組を形作ったのであった。同世界図の影響については鮎沢の古典的研究があるのでそれを参照されたい。また地図の余白を利用して解説文が附せられているが、その冒頭には「地与海本是円形、而合為

「一球」と地球説を説く。伝統的な天田地方説に対し、地球儀とともに大地は円いという観念を広めるのに預かって力があつた。もつとも地球概念の流布という点で最も貢献したのは、『天経或問』であろう。

世界認識という点ではアレニの『職方外紀』を忘れるわけにはいかない。前述の筆者らの調査でも、同書は総計三十七点現存し最多で、『交友論』二十八点(重刊が二十点と多いのが特徴)、『幾何原本』二十六点(重刊十七点)を引き離している。しかも、うち重刊は十点であつて、写本が二十点と多いことが、流布したことを物語っている(吉田(b)、九頁)。たとえば司馬江漢はヨーロッパを聊か理想化して描き、その事例として病院や幼院をあげるが、これは『職方外紀』に載る記事を参照したもので、蘭学以前のヨーロッパ記述の知識源であつた。同書への「小言」で瞿式毅は、世界図を見て考えると、中国はアジアの一〇分の一にすぎず、そのアジアは世界(天下)の五分の一で、中国の外にあつて中国と同じようなのは一〇分の九である。それなのにこれを野蛮(蛮猪)だと排斥するのは、井の中の蛙だと、大国意識や華夷観念を批判している。地図や地球観念は、地理的位置の相対性の認識から、自己の位置の相対的認識を促すのである。この小言の直接的影響の事例はまだ見出さないが、本文

同様読まれたのではあるまいか(もつともこれが各写本に果たしてあるか精査する必要がある)。

アレニのもう一つの書『西学凡』は、西洋の学問分類を伝える文献としては、イエズス会士系著訳書のなかでも最も詳細にわたる。同じ禁書でも後まで禁ぜられただけに、流布という点では『職方外紀』に譲るが、『西学凡』はそれでも見過ごすことが出来ない影響を与えている。同書はヨーロッパの学間に六科あることをまず挙げる。文科(修辭学)、理科(哲学)、医科、法科、教科(教会法)、道科(神学)である。これが文科、理科という言葉に日本人の目が触れた最初の文献ではあるまいか。理学と道学の紹介が中心を占めるが、理学は「義理之大学」とされ、その名のもとで論理学、自然学、形而上学、数学、倫理学の五科目が学ばれる(高祖(a)、吉田、五三—五六頁)。理科という言葉の早い使用例として蘭学者青地林宗『気海観瀾』がよくあげられる。この書の序文で幕府医官桂川甫賢は、『西学凡』の理学の項と自然学の説明文の一節を合成した文を記していることが夙に指摘されている(高祖(b))。理科は上にみたように自然学を含む広い意味での哲学を指していたが、甫賢は理科を自然学ないし物理学と限定して考えていたことが前後より読みとれる。これに対し林宗は凡例で「理科は物則の学な

り」と述べているから、より狭く物理学ないしは科学の意味で使っている。『西学凡』を所蔵していたことが判明している宇田川榕菴は主著『舍密開宗』で、理学を費西加(フィジカ)とし、これを舍密(セイミ)、化学と対比しているから、物理学を指していることは疑いない。現今の理科と文科という区別の原義は、『西学凡』に発し、どうやらこのあたりで始まったように見える。

塩谷岩陰は六芸論で、学校教育制度を論ずるに『西学凡』を引いてヨーロッパの事情を紹介しているという(町田、三三―三三三頁)。この書は重刻本が林家に、また写本は古賀洞庵、篠崎小嶽、宇田川榕菴、渡辺華山の旧蔵書が確認できるといふから(海老沢、二九六頁、高祖^(b)、一六頁、さわめて短文の著書ながら、ほかにも影響例が確認できるかも知れない。

五、靈魂論

靈魂(アニマ)は、『天主実義』などイエズス会士系著訳書では、アリストテレスの靈魂論にもとづいて論じられている。教義書は禁書により輸入禁止になったはずだが、白石がシドッチ尋問に利用したように無論官庫にはあつたらうし、あるいは写本として結構読まれている。

その一例は村岡が夙に明らかにしたように、平田篤胤が『畸人十編』、『天主実義』、『七克』など禁書に指定された書を利用してしたことである。「是等の書が、一部の学者の間には、私かに読まれもし写されもしたことは、信すべき理由があり」(村岡、一五八頁)とあるように、禁書として民間に流布していたらしいことは、このような写本の存在の多くの事例から推定できる。『天主実義』は最近柴田(b)により現代語全訳が出され、近づき安くなった。既に吉田公平、柴田(a)の研究があるが、原文、全訳との比較対照により、篤胤以後の国学者への影響関係の論証が待たれる。もつとも篤胤自身についても、平田神社に伝来する膨大な史料の整理・研究が歴史民俗博物館を中心に進行中とのことであるから(米田・荒俣)、篤胤研究にも新展開が期待できる。

靈魂論の議論は他の禁書にも現れる。たとえば『三山論学記』では、人の善悪が分かれる原因をめぐって、氣と靈魂の論争が行われる。人の靈魂は精氣であるとする葉向高と、氣をアリストテレス以来の四元素のうちの空氣と解し、稟氣は靈性の器具とするアレニとは、そもそも前提が違い論争がすれ違ふのは必然的なのだが、靈魂と身体、創造主としての天主などの問答は興味深い(岡本、二〇三―三三三頁)。その思想的影響については知らな

いが、本書が民間に流出していたことは、長崎遊学中の蘭学者岡研介が、露天商から同書を購入したことを理由に所払いに処せられていることから判明する。このように誰もが忘れた頃に禁書令が突如として施行されるが、研介は処罰のおかげでシーボルト事件に巻き込まれるのを免れている。

靈魂論は実は江戸時代には、精神の座をめぐる論攻のなかで受容された。大槻玄沢は『重訂解体新書』で神経や脳の生理学的機能を論ずる際に方以智『物理小識』や王宏翰『医学原始』を利用して、蘭書の記述を解説している。方以智らの見解は古いガレノス医学の理論に基づき、アリストテレスの靈魂論にも負っている。しかし方や王の議論はもともとアダム・シャルの『主制群徴』やアレニの『性学畅谈』からの引用であった。つまり、医学書ではないが、信仰を説くために万物の靈長たる人の靈魂や精神の働きを司る靈魂などをその一部で論じた教義書を参考としていたのである。『主制群徴』自体が舶載され、読まれたという事例は浅学にして知らないが、間接的にせよ、ここに影響をあたえている。

またイエズス会士系著訳書ではないが、安政二年（一八五五）水戸藩で和刻された『明朝破邪集』（一六三九序）は、江南の反天主教派の四十名の人々の反論を載せてい

る。編者徐昌治は浙江省出身で、儒学を学んだ後に仏教に帰依した人物である。彼は天主教が仏教を批判の対象としていることが許せなかつたという。そのせいか、儒者のみならず仏者からのキリスト教批判も本書には収録されている（岡本、一一五―一四二頁）。たとえばある禅僧は、天主だけが無始無終で世界を創造するのではなく、天地、鬼神、虚空も本来無始無終である。心を離れて世界は存在せず、万物は輪廻し、人の魂も動植物と同じなのに、天主教は魂を三種類に分け、動物には靈魂がないとし、心外の天主を崇めている、と批判する。

以上筆者の関心あるトピック毎にイエズス会士系著訳書の受容について論じた。中国における西洋の思想との出会いの具体相は、日本思想史の上でも比較対照すれば参考になろうし、直接的な影響関係の吟味は江戸時代思想史理解に寄与するだろう。重要性のわりに、研究成果が天文曆算以外には少ないと思われるので、敢えて一筆した。ただ専ら単行本を優先したし、浅学のゆえ重要な論攻に見落としがあることを惧れる。寛恕を請う。

文献

鮎沢信太郎『日本文化史上に於ける利瑪竇の世界地図』

(龍文書局、一九四四再版)。

板沢武雄『日蘭交渉史の研究』(吉川弘文館、一九六一再版)。

伊東多三郎「禁書の研究」、同『近世史の研究』第一冊

(吉川弘文館、一九八二)、一八三—二四九頁。

海老沢有道『南蛮学統の研究』(創文社、一九五八)。

岡本さえ『近世中国の比較思想—異文化との邂逅—』(東京大学東洋文化研究所、二〇〇〇)。

『好書故事・禁書一—四』、『近藤正庸全集』卷三(国書刊行会、一九〇六)、二二五—二四一頁。

高祖敏明(a)「艾儒略著『西学凡』の教育的研究—その内容考察を中心として—」、『上智教育学研究』二(一九七三)、四一—五九頁。

高祖敏明(b)「青地林宗『氣海觀瀾』と艾儒略『西学凡』—理学ないし理科をめぐって—」、『上智教育学研究』三(一九七四)。

小林龍彦「紅葉山文庫に収蔵される梅文鼎の著作について」、『科学史研究』二二(二〇〇二)、二六一—三三三頁。

今田洋三「江戸の禁書」(吉川弘文館、一九八二)。

柴田篤(a)「亜尼瑪と靈魂—イエズス会士の漢訳語について—」、吉田(b)所収、七一—四頁(柴田の『天主実義』関係の論文は柴田(b)、三三九、三四一頁参照)。

柴田篤(b)訳注『天主実義』(平凡社・東洋文庫、二〇〇四)。

『世界図遊覧—坤輿万国全図と東アジア—』(土浦市立博物館第十六回特別展図録、一九九六)。

『地球儀の世界』(土浦市立博物館第十二回特別展図録、一九九四)。

中村喜代三「近世出版法の研究」(日本学術振興会、一九七二)。

中山茂「日本の天文学」(岩波新書、一九七二)。

米田勝安・荒俣宏編『知のネットワークの先覚者 平田篤胤』(平凡社・別冊太陽、二〇〇四)。

町田三郎「塩谷岩陰と中村正直」、柴田篤『幕末明治期における明清期天主教関係漢籍の流入とその影響に関する基礎的研究』(平成四年度科学研究費研究成果報告書、一九九三)、一九—四七頁。

村岡典嗣「平田篤胤の神学に於ける耶蘇教の影響」、村岡著・前田勉編『新編日本思想史研究』(平凡社・東洋文庫、二〇〇四)、一五〇—一六四頁。

『蘭学事始』(杉田玄白著、緒方富雄校注)(岩波文庫、一九八九、第三七刷)。

吉田公平「利瑪竇の『天主実義』について」、源了圓編『神觀念の比較文化論的研究』(講談社、一九八一)。

吉田忠(a)「『天経或問』の受容」、『科学史研究』一五六(一九八五)、二一五—二四頁。

吉田忠(b)「イエズス会士関係著訳書の基礎的研究」(昭和

六二年度科学研究費補助金研究成果報告書、一九八八)。
吉田忠(c)「江戸時代における西洋学問分類の認識」、『日本
文化研究所研究報告』二八(一九九二)、五一―七五頁。
吉田忠(d)「中国経由の西洋知識」、『ヨーロッパとは何か』
(別冊『環』五)(二〇〇二)、一三〇―一三六頁。
渡辺敏夫『近世天文学史』上下(恒星社厚生閣、一九八
六)。

徐海松『清初士人与西学』(東方出版社、二〇〇〇)。

尚智叢『明末清初(一五八二―一六八七)の格物究理之
学』(四川教育出版社、二〇〇三)。

曹増友『伝教士与中国科学』(宗教文化出版社、一九九九)。

孫尚揚『明末天主教与儒学的交流和衝突』(台北・文津出

版社、一九九二)。のち『基督教与明末儒学』(東方出

版社、一九九四)と改題されて北京から刊行。

卓新平編『相遇与対話―明末清初中西文化交流国際学術研
究研討会文集―』(宗教文化出版社、二〇〇三)。

馮錦榮「明末清初方氏学派之成立及其主張」、山田慶児編

『中国古代科学史論』(京都大学人文科学研究所、一九
八九)、一三九―二一九頁。

(東北大学名誉教授)